

家族システム評価尺度 FACESKG を用いた家族支援の研究  
医療ソーシャルワーカーと介護支援専門員の連携ツールとしての FACESKG の活用

社会福祉学専攻 稲垣 知博

要 旨

本研究は、家族関係の態様を示す概念としてオルソンが提唱した家族システム円環モデルの日本語版評価尺度「FACESKGIV-16 (version 3)」(立木 2019)の質問項目を用いて家族システムの評価を行い、その分類と提供されている介護サービスとの関連性を明確にすることにより、家族システムの評価が医療ソーシャルワーカーと介護支援専門員との間で連携ツールとなりうるかを検証することを目的とした。

方法として、墨田区北部の地域包括支援センター、介護支援事業所の介護支援専門員等に対し、仮説①「FACESKGIV-16 評価尺度の『極端型』の家庭では、在宅介護サービスが適切に提供されていない」、仮説②「FACESKGIV-16 評価尺度の『バランス型』の家庭では、在宅介護サービスが適切に提供されている」の2つの仮説に基づき、担当するクライアントとその家族との関係について FACESKGIV-16 (version 3) を用いたアンケート調査を実施した。

アンケート結果から「バランス型」の家庭のほうが「極端型」の家庭と比較して在宅サービスが適切に提供されているという結果となった。さらに、FACESKGIV-16 (version 3) 質問項目の尺度値がプラスマイナス 2.5 以上の複数項目に対して「はい」と回答している群に「極端型」が多いことがあきらかとなった。

結果から、医療ソーシャルワーカーと介護支援専門員が家族システム評価尺度 FACESKGIV-16 (version 3) を用いた家族システムの評価を連携ツールとして活用できることが示唆された。

また、円環モデルの両次元「凝集性次元(きずな次元)」と「適応性次元(かじとり次元)」のうち、凝集性次元(きずな次元)について、墨田区北部の住民意識がきずなの強い側に偏っていることが判明した。その結果、墨田区北部の住民において FACESKG-16 を用いた家族システムの評価とその活用は、両者の共通言語を創り出すための有益なツールとなることが明らかとなった。

キーワード：医療ソーシャルワーカー、介護支援専門員、円環モデル、墨田区